

明末白話小説《三言二拍》における文脈指示詞

劉， 羈
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/1808301>

出版情報：日中言語対照研究論集. 19, pp.170-187, 2017-05
バージョン：
権利関係：

明末白話小説《三言二拍》における文脈指示詞

Anaphoric Demonstratives in the Late Ming Colloquial Story

San Yan Er Pai

劉 鵬

提要： 本文从历史语用学的角度出发，调查了明末白话小说集《三言二拍》中“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”的功能和用法。通过分析“前景”、“背景”和“对话”中的具体例句，本文发现“前景”中常用“那”来更新话者和听者共有的信息；而“背景”中“这”更多出现，用于指示话者独占的信息。其次，“对话”中“此”相对较多，主要指示“包括性主题”。对此，“这”则多用来指示“部分性主题”。同时，“对话”和“前景”中的“其”与“那”功能非常相近，但由于“那”在实际使用数量方面占绝对优势，因此本文推测“其”的语法化程度已经到达一定阶段。“彼”的出现次数最少，可以认为其语法化程度已经很高。同时，明末时期“这”和“那”尚未具备非指示功能，例如“话语标记”以及“连词”等用法。最后，本文利用“那”的“定指用法”和“这”指示“话语主题”的用法，有效地解释了“那舱里狼狼逾逾这件东西”一句中看似远近反转的语言现象。

キーワード： 文脈指示詞 談話構造 文法化 談話の主題 連想照応

1 はじめに

現代中国語では、文脈指示詞のデフォルトとして2項対立の“这・那”系列が挙げられる。これに対し、明代の白話小説¹⁾においては、“这・那”と共に“此”、“其”と“彼”などの指示詞も使われていた。

そこで、本研究は明末に出版された口語体短編小説集《三言二拍》²⁾における“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”という5つの文脈指示詞に焦点を当て、それぞれの機能を明らかにすると共に、現代語における用法と比較することで指示詞の文法化過程における変化を推定する。

2 先行研究

指示詞“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”を扱った従来の研究は（陈 1964、吕 1985、徐时

儀 1999、梁 2004、肖 2005、徐曼曼 2012、黎 2013 など)、主に上古語における指示詞の出現時期およびその意味機能を考察しているが、いずれも単文を扱った断片的なものである。大規模なコーパスの実例をもとに、談話というより広い観点から、同時期において共存していたこの 5 種類の指示詞の異なる機能を体系的かつ網羅的に扱った研究は見られない。

劉 (2012) による定量的調査の結果は、古代白話文から現代語にかけて“此・其”の生起率が次第に減少する一方、“这・那”の生起率が徐々に上昇し、やがて現代中国語のデフォルトとして定着したことを示唆している。その後、劉 (2015) が現代中国語の“这・那”の使用原理を明らかにするため、談話構造 (structure of discourse) の観点から理論的な考察を行った。その結果、物事の状態・性質を表す「背景部 (background)」においては“这”が、物語のプロットラインを担い、継起的な時間の流れを持つ「前景部 (foreground)」では“那”が用いられやすい傾向が観察された。その理由について考察した結果、前景部では話し手が聞き手と共有している談話指示子 (discourse referent) の属性情報を更新するために“那”を用いるのに対し、背景部は主に近称の世界と見なすことができ、話し手は自分が独占している情報を一方的に伝えるときに“这”を用いる傾向が推定された³⁾。そこで、本研究は浜田 (2001a, 2001b) の「前景部」「背景部」及び「発話部」という物語の構造を採用し、明末白話における 5 種類の指示詞の異なる機能の解明を目指す。

3 物語の構造

本節では、物語の構造について紹介する。その代表的な研究には、Hopper (1979)、工藤 (1995)、浜田 (2001a, 2001b) などがある。

Hopper によると、談話には前景の部分と背景の部分があり、「前景」とは「実際の物語の筋 (actual story line)」であり、いわば談話の骨組み構造 (skeletal structure of the discourse) である。一方で、「背景」とは主要出来事以外の「補足的な出来事 (subsidiary events)」を語るものである。工藤 (1995: 193) では、小説の地の文の構造は、「外的出来事の提示部分 (典型的語り)」、「内的意識の提示部分 (内的独白、描出話法)」と「解説部分」の 3 つの部分に分かれている。

より詳細に物語の構造を扱った研究は浜田 (2001a) である。氏は物語の持つ時間性の違いによる重層的な物語像、いわゆる「発話部 (音声的ミメシス)」「前景部 (プロッ

トライン)」「背景部(物語フレーム・描写)」「コメント部(コメント)」という四層構造を提示している⁴⁾。

「発話部」は、直接的には引用符で囲むことのできる部分であり、発話言語を転写したものとして、音声的なミメシスを持つ。前景以下の三層とは、発話 $\longleftrightarrow$ 地の文という対立を構成する。

「前景部」とは、具体的な出来事を示す文によって表示され、物語のプロットラインを担い、継起的な時間の流れを持つ。「男が来た」「犬が走った」は典型的な具体時を示す文である。発話も、それが一回限りのものとして生起するかぎり、始端と終端とに区切られた具体時的出来事として機能する。

「背景部」は物語世界内にある事物の状態・性質を表現する部分である。「その村は海に近かった」「犬が走っていた」といった状態的な文、「山田は時々釣りに行った」といった習慣相的な文は物語世界内である限り、いずれもここに含まれる。背景は、更に具体時を持つものと、非具体時を持つものの二種に下位分類される。

「コメント部」は他の層と異なり、すでに物語外存在であり、現実の話者の立場から物語に対して発せられるコメントとして機能するものである。発話以下の三層とは、物語外 $\longleftrightarrow$ 物語内という対立を構成する。(浜田 2001a: 320)

「背景部」と「コメント部」の違いについて、浜田(2001b)の例文が挙げられる。氏によれば、話芸の場合、演者が物語世界と現実世界との間を往還するのである。たとえば、声のテンションが上がっているところ(▲印)が物語世界内(背景部)、声のテンションが下がっているところ(△印)が物語世界外にいる(コメント部)とされる。

(1) 浜田(2001b: 7)による例

△えーこれは、おなじみの一席でございます。

▲三代の将軍家光公が、寛永11年正月28日、多くの大名旗本を引き連れまして、芝、三縁山広度院増上寺にご参詣でございました。

△これは、御父上、二代将軍のご命日、ま、必ずご命日には、増上寺へご参詣でございました。(後略)

しかし、浜田自身(2001b)も指摘するように、話芸以外のジャンルにおいてはコメント部と背景部の境界はさほど明確なものではない。したがって、本研究では両者を「背景部」に統一して考察を行う。

4 調査結果

本研究は《三言二拍》から約 36000 字のコーパスを調査した結果、下表のような文脈指示詞の生起数が明らかになった⁵⁾。

表 1 文脈指示詞“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”の生起数

	这	那	此	其	彼
発話部	18	8	42	10	1
前景部	10	52	7	7	1
背景部	39	19	16	0	1

表 1 から分かるのは、発話部において“此”が最も多く現れており、前景部において最も使われているのは“那”である。また、背景部においては、“这”が使われやすいが、“那”と“此”のほうもそれほど少なくないことが分かる。さらに、“这”、“那”、“此”に比べ、“其”、“彼”は生起数が少ない傾向が見られる。したがって、明末白話において典型的な文脈指示詞は“这”、“那”、“此”の 3 種類であると考えられる。

では、この 5 種類の文脈指示詞はそれぞれどのような機能を果たしているのか。この問題を解決するため、次の 5 節で具体的な例文を考察する。

5 考察

5.1 “这”と“那”について

明代白話⁶⁾の前景と背景における“这”と“那”の文脈指示的用法は、現代語における用法とよく似ていることが観察される。具体的に言えば、前景部の典型は“那”であり、話し手が聞き手と共有している指示対象の属性情報を更新するために用いる(例(2)(3))。一方で、背景部において話し手は自分のみ保有している情報に言及するときに“这”を用いる傾向が推定される(例(4)(5))⁷⁾。

(2) 就中有个好事的便来问价：“多少一个？”文若虚不省得他们说话。船上人却晓得，就扯个谎哄他，竖起一个指头，说：“要一钱一颗。”那问的人揭开长衣，露出那兜罗锦红裹肚来，一手摸出银钱一个来⁸⁾。

その中の物好きな一人が尋ねます。「一つ幾らかね？」文若虚はこの国の言葉が分からなかったが、船の人は分かります。うそを言ってからかってやろうと思ひ、指を一本突き出して見せました。一つ一銭というわけです。するとその

尋ねた人は長衣をまくりあげ、兜羅錦の赤い腹掛けを出し、手を突っ込んで銀貨を一つ取り出しました。

- (3) 有一行者，手托茶盘，高擎下跪。（中略）过了数日，上皇再到灵隐寺中，那行者依旧来送茶。

すると、ある行者がお盆を両手で持って上皇の前にやってきてひざまずきました。（中略）数日後、上皇は再び靈隠寺に行き、その行者はいつも通りにお茶を出してきました。

(2) (3) の“掲（めくる）”、“送（（お茶を）出す）”という運動動詞から、“那”が含まれる節は前景に相当すると判断できる。前景の部分は物語のストーリーラインであり、そこで主要な出来事や登場人物の行動などが物語られる。話し手は聞き手を物語の世界に引き込むため、なるべく自分だけが占有しているより豊かな属性情報を利用する発話を回避し、相手と対等な立場で談話に関わっているように、“那”系指示詞を用いて情報を提示することが多いと考えられる。

一方で、(4) の“这主人是个波斯国里人（その主人というのは波斯国の人）”、(5) の“这个张大名唤张乘运（この張大は張乗運という呼び名の人）”などの文は動的な時間の流れがなく、話し手の言語表現によって登場人物の属性が叙述されている。その談話の性格から、この部分は背景部に相当すると考えられる。背景部において、話し手による解説や説明が行われる場合、聞き手に開示済みの属性情報を利用せず、現場指示的用法の距離区分説のように、自分のみ保有している情報を「近い」と見なし、“这”で指し示すのである。

- (4) 众人到了一个波斯胡大店中坐定。里面主人见说海客到了，连忙先发银子，唤厨户包办酒席几十桌。分付停当，然后踱将出来。这主人是个波斯国里人，姓个古怪姓，是玛瑙的“玛”字，叫名玛宝哈。

みんなはある波斯人の大きな店に行って落ちつきました。店の主人は海外商人のお客がやって来たと聞くと、まずお金を使って大急ぎで請負の料理人を呼んで酒席を数十卓か用意させ、ちゃんと手筈をととのえた上で顔を出しました。その主人というのは波斯国の人で、姓は奇妙な姓で、玛瑙の瑪の字。名付けて瑪宝哈と言います。

- (5) 正计较间恰好张大踱将来。元来，这个张大名唤张乘运，专一做海外生意，眼里认得奇珍异宝，又且秉性爽慨，肯扶持好人，所以乡里起他一个混名，叫“张识货”。

こんなことを考えているとき、張大がぶらぶらやって来ました。この張大は元来、張乗運という呼び名の人で、海外と取引ばかりをしており、珍品貴宝を見分ける眼はたいしたもの。それに至って気概のある人柄で、善人と見れば力を貸します。そのため、郷里ではあだ名を「張識貨」と呼んでいました。

5.2 “此”と“这”について

次に、発話部における“此”と“这”の用法について分析した結果、「包括的なトピック」⁹⁾を指し示す時に“此”が用いられやすいが、「部分的なトピック」を指す時に“这”が多く用いられることが観察された。たとえば、(6)の“说(説)”と“造化(幸せ)」、(7)の“一主财爻(福の卦)”と“富贵(富貴)”などのような抽象的な概念は包括的トピックであり、それを指す時に“此”を用いることが多い。一方で(7)の登場人物“回回(回族の人)”¹⁰⁾と“主人(主人)”は具体的な対象は部分的なトピックであるため、それを指すのに“这”が用いられやすいことが観察される¹¹⁾。つまり、「包括的なトピック」と「部分的なトピック」を指し示すために使い分けられることは、“此”と“这”は同じ近称でありながら、明末白話において共存していた主な理由であると考えられる¹²⁾。

- (6) 文若虚道：“我家里原无家小，况且家业已尽了，就带了许多银子回去，没处安顿。依了此说，我就在这里，立起个家缘来，有何不可？此番造化，一缘一会，都是上天作成的。”

文若虚の思うには「家には女房子供もなければ、身代もすっかりつぶしてしまったのだ。たくさんの銀貨を持って帰ったって、しまう場所もない。この人のいう通り、俺は此处を住处としても良さそうだ。何という今度の幸せ。それもこれも縁の取り持ち、天のたまものだ」

- (7) 内中一人道：“只是便宜了这回回，文先生还该起个风，要他些不敷才是。”文若虚道：“不要知足。看我一个倒运汉，做着便折本的，造化到来，平空地有此一主财爻。可见人生分定，不必强求。我们若非这主人识货，也只当得废物罢了。还亏他指点晓得，如何还好昧心争论？”众人都道：“文先生说得是。存心忠厚，所以该有此富贵。”大家千恩万谢，各各赍了所得东西，自到船上发货。

その中の一人が言います。「今度はその人の本当の丸儲けだった。でも文先生はもうひと騒ぎ起して、あの人に足りない分を要求すれば良かったね」文若虚は言います。「足るを知ることが大切です。ご存じのように私は運なし男で、何かすれば元手まですってしまう人間だ。ところがよい回り合わせが来たので

す。何のわけもなくこの福の卦が転がり込んできたのです。どうも、人生にはそれぞれの分があつて、無理に求めることはないようです。私たち、もし品物に目の利くあの店の主人がいなかったとすれば、あれは廢物にすぎなかったでしょう。やはりあの人がはっきり分かせてくれたおかげです。あとからとかく言わないほうがよろしくないですか」「文さんは真面目なおとなしい人だからこんな富貴が舞い込んだのだ」と皆は言い、お礼を述べると、それぞれもらったものを携えて船へ戻り、荷を送り出しました。

このほか、聞き手の発話、または聞き手が持ち出した話題を指し示す時に、近称の“此”と“这”を用いることが多い（たとえば、(8)の“此言（その言葉）”、(9)の“这个（それ）”と(10)の“这（それ）”）。これは“此”と“这”の用法における共通点と考えられ、現代中国語における近称の用法に類似している。このことから、明末白話と現代語の指示詞の使用において、中国語話者の聞き手に対する意識や配慮が低いと考えられ、人称原理が存在せず、基本的には距離原理に沿って使い分けられることが推定される¹³⁾。

- (8) 文君道：“官人此行富貴，則怕忘了瑞仙亭上。”相如道：“小生受小姐大恩，方恨未报，何出此言？”

文君が言います。「旦那様、今回の旅は富貴であるため、瑞仙亭のことを忘れるかもしれません」すると相如は言います。「小生はお嬢様から多大な恩恵を受けましたので、必ず恩返しをします。どうしてそんなことを言っているのですか」

- (9) 就对主人道：“好却好，只是小弟是个孤身，毕竟还要寻几房使唤的人才住得。”主人道：“这个不难，都在小店身上。”

そして主人に言うには、「誠に結構なのですが、私は独り者で、ずいぶんたくさんのお使用人のかかえないことには住めませんね」「そんなことはなんでもありません、私の店にいますよ」と主人は言います。

- (10) 张大道：“还有一千两用钱，未曾分得，却是如何？须得文兄分开，方说得。”文若虚道：“这倒忘了。”

張大が言います。「まだ一千両の手数料が分けてないが、どうしたものだろう。文さんに分けてもらえば、みんな文句はありません」「そうそう、そのことを忘れていた」と文若虚は言いました。

5.3 “其”について

ここからは、“其”について分析する。“其”は一般に発話部((11)、(12))と前景部((13)、(14))において現れ、その機能は“那”によく似ていることが分かる。話し手はすでに聞き手と共有している談話指示子(“梧桐树(アオギリ)”、“李直(人名)”、“夜明珠(夜光の珠)”、“人(ひと)”)に新しい属性情報を次々と書き込むため、“其”を使用していると考えられる。

- (11) “伏羲以知梧桐乃树中之良材，夺造化之精气，堪为雅乐，令人伐之。其树高三丈三尺，按三十三天之数，截为三段，分天、地、人三才。”

「伏羲氏は梧桐が樹木の中の良材であって、天然の精気を吸い、雅楽をなすのに良いことを知って、切らせました。その木の高さは三丈三尺。三十三天という数によったもの。これを三段に切って天地人の三つに分けました」

- (12) 上皇道：“朕前日曾替南剑府太守李直说个分上，竟不作准。昨日于寺中复见其人，令我愧杀。”

上皇は「先日、南劍府知事李直の事情を訴えたが、なんと承認されなかった。昨日、靈隱寺で再びその人に会ったが、大変恥ずかしかった」と言いました。

- (13) 解开来，只见一团绵裹着寸许大一颗夜明珠，光彩夺目。讨个黑漆的盘放在暗处，其珠滚一个不定，闪闪烁烁，约有尺余亮处。

ひろげると、綿にくるまった一寸大の夜光の珠一粒、目をうばうほどの光です。黒い漆塗りのお盆にのせ、暗がりに置くと、その珠はころがりながら、きらきらと輝き、一尺ほどの場所を明るくします。

- (14) 正在议论间，只见首先买十颗的那一个人，骑了一匹青骢马，飞也似奔到船边，下了马，分开人丛，对船上大喝道：“不要零卖！不要零卖！是有的俺多要买。俺家头目要买去进克汗哩。”（中略）其人在马背上拖下一大囊，摸出钱来。そんな口争いをしているときです。最初に十個買った人が立派な馬に乗って飛ぶように船の方にやってきて、馬を下り、人をかきわけ、船の上に向かって叫びました。「ちよびちよび売るんじゃない。この俺がどっさり買ってやるぞ。俺の家の親分が買って王様に差し上げたいと仰ってるんだ」（中略）その人は馬の背から大きな錢袋を下ろして、錢を掴みだしました。

しかし、表1の生起数を見ると、“那”の使用数が圧倒的に多い¹⁴⁾。したがって、明末白話において、遠称指示詞のデフォルトは“那”であることが推察された。周知のように、古代語では指定指示として用いられる“其”は、現代語においてその用法はほとんど用い

られず、特定の談話ジャンルにおける代行指示¹⁵⁾、または“各得其所（適材適所）”、“其乐无穷（その楽しみ限りなし）”などの四字熟語や慣用句においてしか生起しなくなった。これは Lehmann（1995）のいう文法化¹⁶⁾の過程における「統語的自由度の損失（loss of syntactic freedom）¹⁷⁾」および「統語的作用域の縮小（syntactic scope reduction）」に相当すると考えられる。

5.4 “彼”について

最後に、“彼”について分析する。現代語では“彼”は固定表現“彼此（お互いさま）”、“此起彼伏（引き続き起こる）”、“知己知彼（おのれを知り、相手をも知る）”などの形でしか現れない。その指示的機能はほとんど消えていると考えられる。明末白話においても、ほかの指示詞に比べ“彼”の生起数が非常に少なく、本研究の調査では3例しか見つかっておらず、すべて発話現場から離れた場所を指す時に用いられる。たとえば、(15)の指示代名詞“彼”は“金家（金家）”、(16)と(17)の指示形容詞“彼国”と“彼处（彼処）”はそれぞれ“波斯国（波斯国）”と“巴蜀（蜀）”を指しているのである。

- (15) 昨寒荆病中，恍惚见八个白衣大汉，腰系红束，对寒荆道：“我等本在金家，今在彼缘尽，来投身宅上。”

昨日、家内が病気で寝ていますと、赤い帯をした八人の白衣の大男がぼんやりと見え、家内に向かって、「私たちはもと金家にいましたが、そちらと縁が尽きましたので、こちらへ身を寄せます」と言いました。

- (16) 元来彼国以银为钱，上有文采。

この国では銀を貨幣にしていますが、銀貨には模様が入っています。

- (17) 到彼处，劝谕巴蜀已平，蛮夷清静。

彼処についたら、真摯に忠告したため、蜀の地の未開民族による内乱が静まりました。

梁（2004）によると、上古語¹⁸⁾において“彼”は遠称指示詞と三人称代名詞（主に主語として用いられる）として機能する例文が数多く観察された。しかし管見の限り、明末白話においては“彼”の使用例は極めて少なく、発話現場から離れた「場所」しか指していないと推定される¹⁹⁾。

以上の観察結果を狭義的な文法化の観点から考えると、明代末期の時点において、“此”は文法化がそれほど進んでおらず、近称指示詞として機能していたと考えられる。次に、生起数を観察すると、“其”は文法化がある程度進んでいると推定される。この両者に対

し、最も文法化が進んだものは“彼”であることが示唆された。

この“此”、“其”、“彼”に対し、明末の時点において“这”と“那”の「統語的作用域の拡大 (syntactic scope extension)」と「語用論的意味の増加 (increase in pragmatic meaning)」といった広義的な文法化現象はまだ見られない。周知のように、現代中国語では、“这”と“那”の主な機能は指示的機能であるが、談話標識（たとえば、“这个...这个...我真的干不了（その...その...本当にできません）”）や接続詞（たとえば、“那你就好好儿干吧！（それではしっかりやってください）”）といった非指示的機能を兼ね備えるようになった。管見の限り、明末白話では談話標識としての“这个（その）”と“那个（あの）”、接続詞としての“那（では）”などの例が見つからなかったため、“这”と“那”はまだこういった非指示的機能を獲得していないと考えられる。

6 近称と遠称の非典型的用法について

以上、“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”の指示的機能における典型的な用法を中心に論じてきた。5 節において言及しているように、“此”と“这”は同じ近称でありながら、それぞれ異なる属性を持つトピック、すなわち「包括的なトピック」と「部分的なトピック」を指示するために用いられると考えられる。一方で、のちに説明するように、トピックの属性による使い分けではなく、談話の流れにおいて最も際立つ「談話の主題 (discourse topic, van Dijk 1977)」を指し示す時に、語り手（または登場人物）は指示対象を「近い」と見なし、“此”と“这”のどちらを使用しても構わない例が観察される。以下、近称“这”と“此”、遠称“那”の非典型的な用法について詳しく考察する。

6.1 近称の非典型的用法

現代中国語では、近称の“这”は観念指示のような働きを果たす場合がある（現場指示的用法の延長とも見なせる）。例文 (18) のような実際の映画のセリフでは、すでに目の前から消えた指示対象を指すのに、話し手は“这”を使うことができる。

(18) (H が S の携帯電話を海に投げ込んだ後、しばらくして S は言います)

S : 这是我手机。(映画『非诚勿扰』)

あれは、僕の携帯ですよ。

同様な用法は、明末白話にも見られる。たとえば、(19) (20) のように、“昨夜这些话（昨夜の話）”、“适间此宝（先ほどの宝物）”、“适间此物（先ほどの物）”は直近の話、目の物ではなく、昨夜の話とすでに目の前から消えた物を指しているのである。にも

かわらず、近称の“这”と“此”が用いられるのである。

- (19) 次日，见老苍头行来步去，并不来回复那话儿。婆娘心下发痒，再唤他进房，问其前事。老苍头道：“不成，不成！”婆娘道：“为何不成？莫非不曾将昨夜这些话，剖豁明白？”

翌日、老人が行ったり来たりして、例の話の返事をしてくれないのを見て、女はうずうずして老人を部屋に招いて尋ねました。老人は「だめだ！だめだ！」と言いますが、女は「どうしてだめですか？もしかしたら（旦那様に）昨夜の話をはっきり言わなかったのですか？」

- (20) 众人看见，又好笑，又好怪，半信不信的一带儿坐下了。酒过三杯，主人就开口道：“敢问客长，适间此宝可肯卖否？”（中略）张大道：“实不瞒你说，这个是我的好朋友，同了海外玩耍的，故此不曾置货。适间此物，乃是避风海岛，偶然得来，不是出价置办的，故此不识得价钱。”

みんなはおかしくもあり、不思議でもあり、半信半疑で並んでおりました。三杯の酒がすすみますと主人は口をひらいて、「お尋ねしますが、先ほどの宝物はお売りになりますか？」（中略）「実を申しますと、こちらは私の友達でして、一緒に海外へ遊びに行っただけなので、品物の購入はしなかったのです。たまたま先日孤島へ風を避けた折、偶然あれを手に入れましたので、お金で買ったものではありません。それで値段がわからないのです」と張大は言います。

現代語では、“昨天晚上（昨夜）”、“刚才（先ほど）”など過去を表す時間副詞が現れると、“昨天晚上*这/那些话（昨夜のあの話）²⁰⁾”、“刚才？这/那件宝贝（先ほどのあの宝物）”のように、一般に近称は使えないのである。このことから、近称のこの使い方に関して言えば、現代語より明末白話のほうが自由であることが推察される。

では、“昨夜这些话（昨夜の話）”、“适间此宝（先ほどの宝物）”、“适间此物（先ほどの物）”のように、明末白話において過去を表す時間副詞が現れても、なぜ近称を用いることができるのであろうか。ここでは、「談話の主題」という概念を援用し、その発動条件について考察したい。

(19) と (20) の“话（話）”、“宝（宝物）”、“物（物）”は、「文の主題（sentence topic）」ではなく、「談話の主題」と捉えることができる。van Dijk (1977) によると、主題は文の主題（局所的・過程的）と談話の主題（大局的・遡及的）という2種類に分かれると

される²¹⁾。談話の主題は談話の流れにおいて非常に際立つものであり、話し手と聞き手に高度に注目され、何度も言及される重要なトピックのことである。このため、たとえ終わっている話、またはすでに目の前から消えた指示対象でも、小説の語り手（または登場人物）はこのような談話の主題を「近い」と見なし、近称を用いて指すことができると考えられる。同時に、すでに言及しているように、現代語でも（18）のように近称が用いられる例が見られるが、“昨夜（昨夜）”、“适间（先ほど）”など過去を表す時間副詞と共起できなくなったため、これは狭義的な文法化過程における統語的自由度の損失と見なすことができると考えられる。

6.2 遠称の非典型的用法について

この節では、遠称“那”の非典型的用法について考察する。

劉（2014）が示すように、現代語の遠称指示詞“那”には、英語の定冠詞 *the* によく似た機能が含まれるとされる。劉（2014）は Minsky（1977）のフレーム理論をもとに、明確な先行詞が存在するか否かにかかわらず、フレームを設定する先行文脈が存在すれば、フレームとデフォルト要素を遠称指示詞“那”で結ぶことができ、連想照応が実現できるとの仮説を提示した。（21）と（22）のように、“恋愛（恋愛）”と“约会（デート）”などの言語表現によって2つのフレームが展開される。“恋愛（恋愛）”のフレームに含まれるデフォルト要素として“男人（男の人）”、“女人（女の人）”、“分手（別れる）”などであり、“约会（デート）”のフレームには“时间（時間）”、“地点（場所）”などのデフォルト要素が含まれると考えられる。このフレームとデフォルト要素との連想照応関係によって、明示的な先行詞が存在しなくても“那”は用いられるとされる。

- （21）由于一个偶然的机会，海南得知了他的璇子在结婚前曾经谈过恋爱，并且还和那个/*这个/*Φ 男人发生了不该发生的事情。（<谋杀，与爱有关>《微型小说选刊》）

偶然の機会を通して、海南は妻の璇子が結婚前に恋愛したことがあって、その男としてはいけないことをしたことを知りました。

- （22）约会的时候，我会根据那/*这/*Φ 天的心情、计划和场所来选择穿什么样的鞋。

(<http://lz.book.sohu.com/chapter-859270.html>)

デートの時、私はその日の気持ち、計画と場所によって靴を選びます。

現代語のみならず、明末白話においても同様な例文が見られる（例文（23）と（24））。

- （23）那问的人揭开长衣，露出那兜罗锦红裹肚来，一手摸出银钱一个来。

その尋ねた人は長衣をまくりあげ、兜羅錦の赤い腹掛を出し、手を突っ込ん

で銀貨を一つ取り出しました。

- (24) 孙小二战战兢兢道:“俞秀才为盘缠缺少,踌躇不进,见在北关门边汤团铺里坐。”
当下就带孙小二做眼,飞马赶到北关门下。只见俞良立在那灶边,手里拿着一碗汤团正吃哩。

孙小二は恐る恐る言います。「俞秀才はそれほど旅費を持っていないので、躊躇して入ってきません。今、北の関門付近の団子屋さんに座っておられます」
するとさっそく孙小二をつれて北関門に駆けつけました。俞良がかまどの横に立って一杯のお団子を持って食べている姿が目に入りました。

この2つの例を見ると、照応詞“兜罗锦红裹肚（兜羅錦の赤い腹掛）”と“灶（かまど）”に対応する明確な先行詞は存在しないが、“长衣（長衣）”と“汤团铺（団子屋）”といったフレームを設定する先行文脈が存在する。したがって、フレームの“长衣（長衣）”とデフォルト要素の“兜罗锦红裹肚（兜羅錦の赤い腹掛）”、フレームの“汤团铺（団子屋）”とデフォルト要素の“灶（かまど）”との連想照応関係によって結ばれていると考えられる。

このほか、(25)のように遠近反転のように見える例文においては、“舱（船倉）”に入っている“东西（もの）”のほうが、登場人物の「主人」から離れていると考えられるが、“舱（船倉）”とその中の“东西（もの）”を指し示すのに、それぞれ遠称の“那”と近称の“这”が用いられている。

- (25) 主人登舟，一眼瞅去，那舱里狼狼逾逾这件东西，早先看见了。

主人が船に登り、見回して目にとめたのは船室の例のあの大きなものです。

一見矛盾しているように見えるが、“那”の定冠詞的な用法と談話の主題を指す近称“这”の用法を援用することで、この問題をうまく説明できる。具体的には、“主人登舟（主人が船に登り）”によって「船」のフレームが設定され、そのデフォルト要素として“舱（船倉）”、“帆（帆）”、“船员（船員）”などが喚起される。そこで、“那”を用いてデフォルト要素の一つである“舱（船倉）”を指し示すことができるのである。同時に、《转运汉巧遇洞庭红（運なし男が洞庭紅によって幸運をつかむこと）》という語りにおいて、終始一貫して語られる重要な談話の主題は「亀の甲羅²²⁾」、つまり“东西（もの）”である。これを指すときに、ほとんどの場合は近称が用いられている。“那舱里狼狼逾逾这件东西（船室の例のあの大きなもの）”における近称と遠称の使い方は、このように解釈できると考えられる。

7 まとめ

本研究の結果は次のようにまとめられる。

まず、談話構造の観点から文脈指示詞の生起数を調査した結果、明末白話の発話部において“此”が最も多く現れており、前景部では最も使われているのは“那”、背景部においては“这”が使われやすいが、“那”と“此”のほうもそれほど少くないことが観察された。同時に、“这”、“那”、“此”に比べ、“其”、“彼”は生起数が少ないことが観察される。したがって、明末白話において文脈指示詞のデフォルトは“这”、“那”、“此”の3種であると考えられる。

次に、明代白話の前景部と背景部における“这”と“那”の用法は、現代語における用法とよく似ていることが観察される。前景部の典型は“那”であり、話し手が聞き手と共有している指示対象の属性情報を更新するために用いる。一方で、背景部において話し手は自分のみ保有している情報に言及するときに“这”を用いる傾向が見られた。次に、発話部において「包括的なトピック」を指し示す時に“此”が用いられやすいが、「部分的なトピック」を指す時に“这”が多く用いられることが観察された。同時に、聞き手の発話を指し示す時に近称の“此”と“这”を用いることが多いことから、現代語と同様に、明末白話の指示詞の使用においても中国語話者の聞き手に対する意識が非常に低いと考えられる。さらに、“其”の機能は“那”とよく似ているが、生起数から見れば、明末白話において遠称指示詞のデフォルトは“那”であることが推察された。最後に、その他の指示詞に比べ“彼”の生起数が非常に少なく、すべて発話現場から離れた場所を指す時に用いられることが分かった。

以上の考察から、明代末期の時点において、“此”は文法化がそれほど進んでおらず、近称指示詞として機能していたと考えられる。これに対して“其”はある程度文法化が進んでいると推定され、最も文法化が進んだものは“彼”であることが示唆された。“此”、“其”、“彼”に対して、“这”と“那”は具体的・指示的な機能から抽象的・非指示的な機能に拡大する傾向はまだ見られないため、語用論的意味の増加など広い意味での文法化がまだ進んでいないと考えられる。

最後に、“那”の定冠詞的な用法と談話の主題を指す近称“这”の用法を援用することで、明末白話における“这”と“那”の非典型的な指示機能について説明した。

以上、本研究は明末白話《三言二拍》における“这”、“那”、“此”、“其”、“彼”の用法と使い分けを明らかにするため考察を行い、一定の研究結果を提示することができた。し

かし、中国語指示詞の歴史的発達を体系的に記述し、指示詞の文法化過程における変遷を推定するためには、明代以前の早期白話に加えて、明代以降の清代と中華民国時代の白話小説における用法について詳しく調査する必要がある。これを今後の課題として記しておきたい。

注

- 1) 古代中国語には二種類の書き言葉があり、その一つは「文言」であり、もう一つは「白話」である。一般に、文言は文章体の書き言葉のことで、白話は口語体をベースに作られた書き言葉であり、現代中国語の前身とも言われている。本研究では白話のみ扱う。
- 2) 具体的には、馮夢竜編の《喻世明言》、《警世通言》、《醒世恒言》の“三言”と凌濛初編の《初刻拍案惊奇》と《二刻拍案惊奇》の“二拍”が含まれる。出版年代は一般に 17 世紀前半とされる。
- 3) 物語の「前景部」、「背景部」及び「発話部」については、のちの第 3 章において詳しく解説する。
- 4) 浜田によれば、物語に対する認知科学的なアプローチとしては物語スキーマ (Rumelhart 1975) と物語文法 (Thorndyke 1977) があるが、これらの研究は発話から描写にいたる内部構造を持つ物語の構造を捉えるには至らない。浜田は日本語の記述文法を踏まえながら、物語の持つ多様な時間性に焦点を当て、四層構造からなる物語像を提示したのである。
- 5) 《转运汉巧遇洞庭红》、《俞伯牙摔琴谢知音》、《庄子休鼓盆成大道》、《俞仲举题诗遇上皇》などが含まれる。
- 6) 本研究の例文のほとんどは、《三言二拍》から引用しているため、出典の記述を略すが、《三言二拍》以外の例文は出典を記す。
- 7) 《三言二拍》の和訳は、千田九一 (訳者代表) 『中国古典文学全集』18-19 (平凡社) を参考し、一部修正を行った。なお、常体と敬体の使用については原作に従う。
- 8) “那兜罗锦红裹肚”の“那”は、典型的な文脈照応ではなく、いわゆる定冠詞的な機能を果たしているものである。これについては、のちの第 6 節において詳細に説明する。
- 9) 劉 (2015) はメタ言語的な名詞を「包括的なトピック」、普通名詞を「部分的なト

ピック」と呼んでいる。包括的なトピックとは、談話の構成要素ではなく、談話全体、ないし一部をまとめるような抽象的なトピックである。一方、部分的なトピックとは、談話に登場する具体的な対象を言い、包括的なトピックに含まれる構成要素を指す。

- 10) “回回”は、“回民（回族の人）”に対する差別語である。本来使うべきではないが、ここでは《三言二拍》の原文を使用しているため、この用語もそのまま引用する。
- 11) 「白話」においても登場人物の発話などにおいて「文言」が埋め込まれることがあるため、文体的な要因も視野に入れる必要があり、登場人物による文言の発話においては“此”はより多く現れると考えられる。本研究の表 1 を見れば、「発話部」において“此”が最も多いが、小説の語り手による地の文においてはそれほど用いられていない傾向は、「白話における文言の埋め込み」に関係していると言えよう。この点に関しては、神戸市外国語大学の竹越孝先生、下地早智子先生から貴重なご意見を頂いたため、ここにて御礼を申し上げる。
- 12) のちの 6.1 節において述べるように、談話の流れにおいて最も際立つ「談話の主題」を指し示す時に、この原理に縛られない例が観察される。
- 13) 劉（2015）は現代中国語における“这”と“那”の使い分けについて、「中国語では話し手が自分にとっての心理的な距離によって文脈指示の“这”、“那”を使い分ける傾向は、現場指示的用法とよく似ているということが分かる。（中略）中国語の現場指示の場合、たとえ聞き手の身につけているものであっても、話し手にも近ければ、話し手は“这”を持ってそれを指すことができる。言い換えれば、話し手は聞き手の縄張りをあまり意識せず、自分からの距離をもとに指示詞を使い分けている。このことは、文脈指示詞の用法にも反映されている」とある。
- 14) 3つの談話構造における生起数は、“那”は 79 回で“其”は 17 回である。
- 15) 代行指示の場合は、特定の談話ジャンルにおいて“其”が用いられることがある。たとえば、ニュースや学術論文では“奥巴马总统及其夫人（オバマ大統領とその夫人）”、“其原因在于…（その理由とは…）”などのように、“其”の代行指示的用法が見られる。指定指示と代行指示の詳細について、庵功雄（2007）を参照してほしい。
- 16) Traugott（2011, 福元訳）によると、文法化とは、文法的要素が史的発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語論的・音韻的変化が生じることと捉えることができる。文法化は主に狭義的な立場と広義的な立場の 2 つに分かれて

いる。前者は発達によって縮小 (reduction) が生じる考え方であり、後者は拡張 (extension) が起こるという考え方である。両者は文法に関する理解の違いによるものであり、前者の場合、語用論は核となる文法に含まれず、後者の場合、語用論は文法の一部であるとされる。

- 17) 「依存性の増加 (increase of dependency)」(Lehmann 1995) と呼ばれる。
- 18) 梁 (2004) の調査では、《诗经》《左传》《论语》など紀元前の 12 作品が扱われた。
- 19) 本研究の調査は《三言二拍》の一部に限られるが、その他の明末白話において“彼”の場所指示用法以外の指示的機能が見られる可能性は否定できない。
- 20) 本研究では、「不自然」を「*」で、「やや不自然」を「?」、「空位」または「ゼロ照応」を「Φ」で示す。
- 21) 「文の主題」と「談話の主題」は、談話の展開に沿った分け方であるのに対し、「包括的なトピック」と「部分的なトピック」は、トピックの属性による分類であるため、区別する必要がある。
- 22) のちに鼃竜 (だりゅう) の殻であることが判明する。

参考文献

- 庵 功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版, 日本東京
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房, 日本東京
- 浜田 秀 (2001a) 「物語の四層構造」『認知科学』8-4, 319-326.
- 浜田 秀 (2001b) 「物語開始部の諸相」『文学と認知・コンピュータ』『第 11 回定例研究会要旨集(G-3)』1-7.
- 劉 羈 (2012) 「物語における日本語と中国語の文脈指示詞の対照研究 - 談話構造の観点から」『日中言語対照研究論集』第 14 号, 78-92.
- 劉 羈 (2015) 『談話空間における文脈指示』京都大学学術出版会, 日本京都
- Traugott, E. C. (福本広二訳) (2011) 「文法化と (間) 主観化」高田・椎名・小野寺 (編著) 『歴史語用論入門 - 過去のコミュニケーションを復元する』59-70, 大修館書店, 日本東京
- 陈 治文 (1964) <近指指示词“这”的来源> 《中国语文》, 6, 442-444.

- 黎 路遐（2013）〈定指代词“其”的发展〉《中国语文》5，421-429.
- 梁 光华（2004）〈论上古汉语第三人称代词“彼”〉《贵州文史丛刊》第2期，55-62.
- 劉 羆（2014）〈“那”的非典型语用功能〉《中国語学》第261号，84-102.
- 吕 叔湘（1985）《近代汉语指代词》学林出版社，中国上海
- 肖 娅曼（2005）〈上古“是”判断句与“此”判断句之比较〉《古汉语研究》3，11-15
- 徐 曼曼（2012）〈近指代词“兹”、“此”、“这”历时更替考〉《西南交通大学学报》13-1，27-31.
- 徐 时仪（1999）〈指代词“这”来源考〉《大同高等专科学校学报》13-2，58-62.
- Hopper, P. (1979) Aspect and Foregrounding in Discourse. *Syntax and Semantics* 12: *Discourse and Syntax*, 213-241.
- Lehmann, C. (1995) *Thoughts on Grammaticalization*. München: Lincom Europa.
- Minsky, M. (1977) Frame System Theory. In P. N. Johnson-Laird and P. C. Wason (eds.), *Thinking, Reading in Cognitive Science*, 355-376.
- Rumelhart, D. E. (1975) Notes on a Schema for Stories. In D. G. Bobrow & A. Collins (eds.), *Representation and Understanding: Studies in Cognitive Science*. 211-236.
- Thorndyke, P. W. (1977) Cognitive Structure in Comprehension and Memory of Narrative Discourse. *Cognitive Psychology*, 9, 77-110.
- van Dijk (1977) Sentence Topic and Discourse Topic. *Papers in Slavic Philology*, 1, 49-61.

出典資料

- 《三言二拍》冯梦龙·凌濛初，天津古籍出版社，中国天津，2009年
- 『中国古典文学全集（18,19）』千田九一（訳者代表），平凡社，日本東京，1958年